

日本フランス語フランス文学会

cahier

08

septembre 2011

I 2011 年度秋季大会ワークショップ

- 1 文学におけるセクシュアリティ — 文学と欲望の問題 —
 吉川佳英子 高岡尚子 関修
 合田正人 若森栄樹 1

- 2 Des devenirs-végétaux en littérature : aperçus de la flore
 contemporaine
 François BIZET 5

- 3 アルジェリア戦争と複数の文学 (La guerre d'Algérie et les
 littératures)
 鶴飼哲 9

II 書評

- 塩川徹也『発見術としての学問——モンテーニュ、デカルト、
 パスカル』
 石川知広 10

- 小倉博孝編『コルネイユの劇世界』
 千川哲生 12

- 松室三郎・菅野昭正・清水徹・阿部良雄・渡辺守章編『マラル
 ルメ全集 I 詩・イジチュール』
 山中哲夫 14

- 真屋和子『ブルースト的絵画空間——ラスキンの美学の向こ
 うに』
 湯沢英彦 15

- アンリ・ラクシモヴ (吉川佳英子・岩野卓司訳)『失われたパ
 リを求めて——マルセル・ブルーストが生きた街』
 田村奈保子 17

- 岩野卓司『ジョルジュ・バタイユ——神秘経験をめぐる思想
 の限界と新たな可能性』
 福島勲 19

- アントニーヌ・マイエ (大矢タカヤス訳)『荷車のペラジー：
 失われた故郷への旅』
 細川哲士 21

2011年度秋季大会ワークショップ

ワークショップ1

文学におけるセクシュアリティ ― 文学と欲望の問題 ―

コーディネーター：吉川佳英子（京都造形芸術大学）

パネリスト：高岡尚子（奈良女子大学）、吉川佳英子（京都造形芸術大学）、
関修（明治大学）、合田正人（明治大学）

司会：若森栄樹（獨協大学）

吉川佳英子

今日、セクシュアリティはわれわれの社会に多岐にわたって問題を提起している。ポルノグラフィーの氾濫、ペドフィルによる犯罪、同性愛と同性婚、フェミニズムと女性解放、体外受精や代理母などの生殖医療の発展、性倒錯や性同一性障害を病とする精神医学、等々。文学の歴史を振り返ってみても、性とのかかわりは否めないであろう。文学研究に関しては、フロイト以来の精神分析は文芸批評に多大な影響を与えてきたし、フーコーの『性の歴史』は性の抑圧ではなく告白という視点から歴史を読み替えることで、文学における告白の問題に刺激を与えてきたし、ロゴス中心主義を脱構築するデリダはロゴスと男根の関係を意識しながら言語と性の密接な関係を問題にして文学テキストを論じてきた。このようにセクシュアリティはすぐれて文学的な主題なのである。本ワークショップでは家族や同性愛、言語の視座から19世紀-20世紀の文学におけるセクシュアリティを考察し、このテーマの幅広さ、奥深さを確認した。

「母親の身体」のセクシュアリティ

高岡尚子

19世紀前半のフランスにおける女性のセクシュアリティに注目するとき、「母」は興味深い存在として立ち現れる。なぜなら、「母」は性別としては「女」でも、いったん「母」となれば「女」は捨てるべきとされ、その結果、結婚前の娘には徹底的に処女であることが求められ、結婚後の妻は「女」を脱色した献身的な「母」にならねばならなくなる。このような規範的言説が、処女と母体の中間点に位置する女性のセクシュアリティを否定し、隠ぺいする原動力とな

ったと考えられる。

一方で、男性が抱く性的ファンタズムは、「処女」あるいは「母」を所有したいという、禁忌を犯す欲望によって動機づけられるため、文学作品は、観念上の「処女→母」と現実の「女」が齟齬を起こした結果の、逸脱や危険を多く描くことになる。その例として『赤と黒』のレナール夫人や『感情教育』のアルヌー夫人を挙げることができる。

ジョルジュ・サンドの初期小説『ジャック』もまた、この系列に連なる作品ではあるが、決定的に異なる部分も存在する。主人公の女性フェルナンドは、子を得ることにより、完璧な処女から完璧な母へと変化するが、その後、彼女は恋人との間に「女であること＝セクシュアリテの存在」を発見することになる。また、夫との間の子を失うことへの罪悪感が、恋人との間に誕生することになる子への期待によってあがなわれる点でも、レナール夫人やアルヌー夫人とは反応を異にしている。

確かに、彼女は恋人との間に子ができたことにより、心身が一体となったセクシュアリテの発揮を自覚するように描かれており、それはすなわち、女は母になることによってしか救われないという意味にもとれる。しかし、この事態こそが、女性のセクシュアリテが、どれほど周到に否定されていたかということの証明だとも言えるだろう。

「性」や「種」の境界を越える可能性をめぐって

—ブルーストとコレット—

吉川佳英子

フローラ系の作家ブルーストは、薔薇に例えられるアルベルチーナをはじめとしてシャルリュスに至るまで、人間を、さながら意志をもたない植物のようにとらえて描写する。ベケットの指摘にもあるように、感受性に忠実な彼の登場人物たちは、従って「性」の境界を越える困難を知らず、また恥や罪意識とも無縁である。ただ、そんなブルーストも作家仲間たちとの関わりを通して、初めて動物に目を向ける事態が生じる。

批評家ポール・レオトーが NRF 誌に書いた「拾ってきた猫」についてのエッセイをたまたま読んだブルーストは、さっそくガリマールの出版部門総務部長ジャン・ギュスターヴ・トロンシュにあてて、「猫を飼おうと思ったけれども、生きている猫は諦めて、まだ読んでいないコレットの『動物の対話』を手に入れるつもり」という旨の手紙を書く（日付けは、1922年8月1日以降、8月23日以前）。晩年に至り、ブルーストは、コレットが好んで描く「動物が本能に基づくありよう」に、共感を抱くようになったようだ。

『動物の対話』や『動物の平和』において、コレットはオリジナルな観察眼

で動物の実態を描出し、当たり前の光景を巧みに変容する。クリステヴァは、評論 *Le génie féminin* の中で「視覚はコレットにとっては、欲望の器官である」と指摘する。コレットは、このようにして、知性の領域をはずれて感性に基づく領域に立ち、現実の風景を拡大することで、19世紀からのレアリズムを巧みにかわしている。

クリステヴァはまた、コレットにおいては、自然の中で人も猫もあたかも生物の種の区分を越えたかのように一体化することに言及する。プルーストの作品中には、性の別をそれと意識せず越えてしまう登場人物像が示されているが、コレットの場合は、さらに生物の「種」の違いをも越え得る可能性を孕んでいるようだ。「感性」に導かれる生物を描くことで、これらの作家たちが、19世紀レアリズム小説の傾向から距離をおき、人間のとらえ方をより大きく開放した事実を強調しておきたい。

ポスト・ゲイ文学＝エイズ文学に関する一考察

関修

近年の現代フランス「ゲイ」文学で、エルヴェ・ギベールの作品が多く翻訳され、シリル・コラルの『野生の夜に』が著者自身の主演監督映画と共にヒットしたのは、ひとえにそれらがエイズをテーマにし、著者自らがその病気で早世したことが大きな理由の一つと考えられる。しかし、日本におけるそのブームの背景には、ニューアカに代表される現代思想ブームに端を発し、フェミニズム、クイア思想といったジャンルの交錯の中でよりマイナーなものへと触手が動いていったことを忘れてはならないだろう。また、フーコーの死がエイズを公表することなく歴史に刻まれたことも大きな波紋を呼んだ。それに対し、ギベールは一種露悪的でありながらも、時間の流れは個々異なるものであり、エイズとは老化が早く訪れるに過ぎず、そこに美しさを見出すべきという哲学的視点から小説を書き評価されることになる。しかし、1996年に始まった抗ウイルス薬の多剤療法によってエイズが慢性病化の経過を辿るに至り、ゲイ文学はギベールらの従来の作法が通用せず、方向転換を余儀なくされる。そのヒントの一つは、1988年にエイズで逝去した68年五月革命の立役者の一人ギイー・オッカングムが死の一年前に公刊した小説『イヴ』にあると考えられる。私小説的手法でなく、アレゴリー的にエイズを描き出したこの作品は、エイズで死期が迫ったゲイの主人公アダムが自身にそっくりの女性イヴと恋に落ち、最新の医学的操作でウイルスに感染していない子供を作り、その誕生と同時に死に至るというものである。ここには生きながらえるというエイズがその後辿る状況を予想させるものがあり、しかも同性愛を特権化することなく、多様なセクシュアリティの一つとして他なるものへと開かれていることと解するオッカング

ムの一貫した思想と通底するものがある。ゲイであることが日常の一コマである限りにおいて文学化する価値あるものとして探求することこそ、今後のゲイ文学の課題であると考えられる。

言語とセクシュアリティ ——エレーヌ・シクスーのジョイス論を起点として

合田正人

言語といいセクシュアリティといい、そのいずれもが関係性と差異についてそのつど改めて思考することを私たちに、そして作家たちに強いている。そのような作家の一人として、アルジェリアのオランに生まれたユダヤ系作家エレーヌ・シクスー（1937- ）を挙げることができるだろう。パリ第八大学に女性学センターを創設した人物で、エクリチュール・フェミニンの旗手として、と同時に、ジャン・ジュネのような作家をも論じる書き手として著名で、日本語圏でも『メデューサの笑い』などが邦訳され、友人ジャック・デリダとの知的交流も注目されている。が、メディシス賞受賞作『内部』（1968）と同年に彼女が出版したジェイムズ・ジョイスをめぐる浩瀚な博士論文『ジェイムズ・ジョイスの流浪または置換の技法』については、これまでのところ十全な考察の対象になったことはないように思われる。しかし、とりわけ父、母、兄弟、妻といった家族をめぐるジョイス論の考察は、『フィネガンズ・ウェイク』を生み出していくジョイスにおける言語の崩壊・発生をめぐる考察と相俟って、シクスーの創作の中心部に住まい続けたのではないだろうか。例えば『内部』での父、母、兄弟描写はまさにその雄弁な証左ではないだろうか。時間的制約のため、シクスーの作品の分析に着手することはできなかったけれども、報告では、哲学者ドナルド・ディヴィッドソンの言語論（「言語というものは存在しない」）、精神科医ハリー・スタック・サリヴァンの「パラタクシス」論（この点については中井久夫の考察を参照した）、更にはジャック・ラカンのL図、R図をも勘案しながら、シクスーが注目した『若い芸術家の肖像』や『ユリシーズ』のいくつかの場面を取り上げ、想像的言語、象徴的言語の瓦解の過程と、そのなかで一種の「沿岸地帯」として口を開けていくリビドー的「界面」、そしてまた、そこに渦巻く離散数的には分節化できない液状化した言葉の溢出について語った。

司会者から

若森栄樹

文学とセクシュアリティの関わりについて、主にラカン・デリダ的観点から2点指摘した。1）文学とセクシュアリティは不可分に結びついている。しかしこ

の結合の把握は、縁（bord）についての新たなトポロジーなしには不可能である。2) 現実のセクシュアリティに関しては、宗教と結びついた「結婚」制度を、同性愛的結合を含む「市民連帯契約」へとシフトさせ、いわゆる「複合家族」を中心に、家族の在り方を再考すべきではないだろうか。

*

悪天候にもかかわらず、会場には百名を超える聴衆が集まり、満員となった教室は大変に盛況であった。時間をさらにたっぷりかけてディスカッションを続けたかったくらいである。震災の影響下にもかかわらず、見事に大会の実現を果たし、我々にワークショップの機会を与えて下さった主催校のご苦勞に感謝したい。

ワークショップ2

Des devenirs-végétaux en littérature : aperçus de la flore contemporaine

Coordinateur : François BIZET (Université Waseda)

Intervenants : Agnès DISSON (Université d'Osaka), Jacques LÉVY (Université Meiji Gakuin).

François BIZET

Prendre acte que le règne végétal n'est plus pour les écrivains d'aujourd'hui un simple réservoir de métaphores et de symboles, mais un véritable modèle de fonctionnement pour l'écriture, tel était l'un des objectifs de cet atelier. C'est dans cette perspective que François Bizet, initiateur de cette réflexion, a commencé par lier la formule « devenir arbre », extraite d'*Un homme qui dort* de Georges Perec, au dispositif intertextuel qui fait la marque du roman. Pour la science botanique moderne, l'arbre est en effet un « être collectif » qui échappe à la définition classique de l'individu. « Devenir arbre » signifierait donc dans le cas de Perec devenir multiple, devenir littérature. Le recours revendiqué à ce qu'il appelle un « art “citationnel” » lui permet de conjurer la *disparition* (le génocide des Juifs d'Europe) sur laquelle son existence se découpe, l'écriture et la réécriture signifiant pour lui « une parenté retrouvée ». Huit ans avant que Gilles Deleuze et Félix Guattari ne se penchent sur le « devenir-animal », la formule de Perec fournit donc du concept une première vision originale puisque la distance à franchir, de l'homme à la plante, est à la fois biologiquement et philosophiquement plus grande que de l'homme à l'animal. Deleuze

n'a d'ailleurs pas manqué, dans *Critique et clinique*, d'évoquer, parmi d'autres *devenirs* possibles, un « devenir-végétal ». Néanmoins on ne peut que constater la prééminence dans sa pensée de la figure animale. De ce point de vue, il s'inscrit dans un courant général de réflexion sur l'animalité, extrêmement fertile depuis les années soixante-dix jusqu'aujourd'hui, tant au plan philosophique que scientifique. Le végétal est loin d'avoir une tribune aussi large. Bien que le travail du botaniste Francis Hallé ait eu récemment quelque écho en anthropologie des réseaux, le végétal fait figure de parent pauvre dans le monde de la pensée. On peut se demander pourquoi. Il y a quelques années, le critique Thierry Marin suggérerait que si la plante renvoie à « l'hétérogène », c'est parce qu'elle apparaît à l'esprit spéculatif comme un organisme sans tête. Il y aurait là une étrangeté radicale qui ferait « vaciller la métaphysique, soucieuse d'une essentielle polarisation de l'être sous un seul chef, d'une orientation fléchée vers un horizon téléologique et d'une maîtrise des filiations. »

Ce n'est pas tant sous l'angle du « devenir » que Jacques Lévy aborde *Pistils*, roman qu'Abe Kazushige a écrit à la suite de *Sin semillas*, que d'une *puissance* du végétal. Dans cette œuvre de la transmission, de la filiation et de la transformation, le végétal est bien une puissance stratégique et psychédélique d'immixtion de la fiction dans l'histoire (l'auteur se réfère en effet au « flower movement » et à la pensée « new age », cultures qui ont marqué la décennie de sa naissance, en 1968, et auxquelles il a voulu redonner forme) mais aussi dans le mythe (Osanagi, « l'enfant rouge »). Cette « confluence hallucinée du fictif et de l'historique » se manifeste d'abord à travers la fabrication proliférante de *styles*, terme éminemment végétal dans lequel Jacques Lévy voit la marque majeure de la démarche créatrice de l'auteur : mépris du style « littéraire » et attention portée aux « procès de l'énonciation », par « élargissements discursifs » continus. Elle se manifeste aussi et surtout en un jeu onomastique complexe, « résolument végétal » puisqu'il va jusqu'à végétaliser les noms déjà existants à travers la notation en *katakana*, mode graphique des noms de plante. Cette onomastique est au centre des processus de transmission car la narration d'Aoba (« feuille verte ») relate sur trois générations le combat de l'héritage du nom, et parallèlement, remonte verticalement l'histoire jusqu'au mythe fondateur d'Osanagi. Mais elle donne aussi sa raison d'être à l'« art rhizomatique » propre au roman : le nom de la famille dont il est question est Ayame (« iris », rhizome par excellence). Aussi n'est-il pas étonnant que la figure majeure de *Pistils* soit celle du continuum. Alors que la stratégie de *Sin semillas* était de séparer ce qui est confondu, celle de *Pistils* est de réunir ce qui a été séparé (entre autres : l'île Oki et Jinmachi, le Daibutsu de Kamakura et le mont Osanagi), par l'altérité, dans le règne conjoint du féminin et du pluriel qui,

selon Jacques Lévy « défait l'individuel, notre plaie contemporaine ».

C'est plus résolument encore sur les modèles fonctionnels végétaux que se penche Agnès Disson, à propos de trois poètes d'aujourd'hui : Suzanne Doppelt, Ryoko Sekiguchi et Justine Landau. Contrairement à la rhétorique classique, qui place la fleur au centre de son dispositif, la poésie de l'extrême contemporain recourt non plus aux images, mais aux figures, non plus aux motifs, mais aux fonctionnements, bref : elle « s'attache en priorité au percept, plus qu'à l'affect ». C'est ainsi que les auteurs en viennent à imprimer aux structures textuelles des modes d'être du végétal (la réitération, la prolifération, le rejet, la bouture), qui ont pour effet d'approfondir l'altérité silencieuse de la plante. Respecter cette altérité, « honorer la différence », tel est l'enjeu de la nomination chez Ryoko Sekiguchi, poète japonaise d'expression française qui emprunte au multilinguisme (japonais, français, latin, arabe, hébreu, mozarabe), pour déjouer les pièges de la taxinomie, forcément appauvrissante. Si la réflexion ici tourne autour du nom propre, le texte n'en présente pas moins un foisonnement proprement végétal de citations-boutures, empruntées à un vaste fonds culturel et scientifique. Même prolifération intertextuelle chez Suzanne Doppelt, poète et photographe travaillée par les « aléas de la perception » et par l'étrangeté familière des plantes. Les textes de Vinci, Apollinaire, Pythagore, Démocrite se trouvent pris d'un livre à l'autre dans « un mouvement circulaire ou plutôt spiralaire d'hybridation, de cross-pollination », dans un réagencement indéfini que l'abstraction géométrique des photographies vient contrebalancer. Le questionnement est plus radical encore chez Justine Landau qui pose clairement la nature rhizomatique de la syntaxe, à partir d'une plongée dans le monde des champignons, dont on connaît la fonction dans le processus de dégradation organique. Portée ici encore par un important substrat intertextuel (encyclopédistes, poètes persans), cette poésie se veut davantage qu'une méditation sur la mort : une réflexion sur une « sortie possible du monde animal ».

La prolifération, abondamment illustrée dans les interventions précédentes, est également à l'œuvre dans les fictions d'Antoine Volodine, étudiées par François Bizet, et particulièrement dans le dispositif des hétéronymes. Avec la communauté d'écrivains « post-exotique », nous sommes face à un renversement total du paradigme de l'auteur, tel que les cadres juridiques en ont été fixés à la fin du XVIII^e siècle. Ce qui prolifère, dans l'ombre du porte-parole public (Antoine Volodine signe des entretiens, apparaît dans les colloques), c'est un énorme bouillon de culture fictionnel, un vivier de sens incontrôlables, un réservoir grouillant de pulsions narratives fuyant tous azimuts la fatalité du singulier — tout ce que la « figure idéologique de l'auteur »

(Michel Foucault), contemporaine du triomphe de la propriété privée, a essayé de conjurer et de baillonner.

Une telle plastique textuelle semble renvoyer à la nature coloniale, composée, collective du végétal. D'abord parce qu'elle répond à un mode spécifiquement végétal de croissance reposant sur la capacité des plantes à répéter « un nombre illimité de fois leur programme de développement » (Hallé) : la *réitération*. Bien que les hétéronymes soient présentés comme morts dans la fiction, leurs livres continuent de se multiplier, y compris dans l'espace éditorial réel (Lutz Bassmann par exemple). Le dispositif permet donc la perpétuation des auteurs : noms et œuvres sont repris en charge immédiatement par la communauté qui se les approprie et les diffuse. La fonction diégétique de cette communauté d'écrivains (elle même fragmentée en plusieurs), est de mimer ce qui se joue sur le plan énonciatif : une démultiplication arborescente des voix émettrices, mais d'une arborescence horizontale, non hiérarchisante. Il serait donc inutile de chercher un auteur souche : le nom de Volodine ne se présente jamais comme le tronc commun de tous les « narrateurs », mais comme l'un des nombreux bourgeonnements possibles de la passion fictionnelle. Cette profusion se double d'une convertibilité généralisée : « Pour un narrateur post-exotique, de toute façon, il n'y a pas l'épaisseur d'une feuille de papier à cigarette entre la première personne et les autres. » (Volodine) « Je » n'est plus un moment dialectique, mais une interface. Il n'a pas de tête, pas d'ego, pas d'intériorité, c'est une instance erratique, une réaction en chaîne où des voix se donnent inlassablement le relais en une narrativité de type fractal, mouvante et bruisante comme un feuillage, c'est-à-dire comme un gigantesque déploiement de surfaces. C'est là une autre des caractéristiques du végétal : tandis que l'animal, mobile et prédateur, se définit en volume, la plante, immobile, se définit en surface de captation. De ce point de vue, les quartiers labyrinthiques de haute sécurité où croupissent les narrateurs post-exotiques fournissent une matrice idéale : on y communique les fictions en frappant sur la tuyauterie qui croît à travers toutes les cellules de la prison, en un buissonnement multidirectionnel d'écoutes, de réceptions et de transmissions. Il y a donc loin, très loin même de la suractivité post-exotique à la mort annoncée de l'auteur. Au contraire, Volodine remotive le sens étymologique du mot lui-même : *augere*, dont est dérivé *auctoritas*, signifie « augmenter ». L'auteur, c'est bien de nouveau « celui qui fait croître » et qui fait proliférer le sens.

Il serait aventureux de donner une conclusion à une réflexion naissante. Peut-on parler d'un « devenir-végétal » de l'auteur ? Si la formule mérite d'être étayée, il n'en reste pas moins que les modalités propres du végétal informent certaines recherches poétiques et narratives, dans des champs culturels différents. Il y a là peut-être une

façon d'échapper au cercle fatal de l'animalité, à ce qu'il faut bien appeler un zoocentrisme, dans lesquels nous sommes quoi que nous fassions rejetés sans fin.

ワークショップ3

アルジェリア戦争と複数の文学 (La guerre d'Algérie et les littératures)

コーディネーター：鵜飼哲（一橋大学）

パネリスト：カトリーヌ・ブラン（パリ第3大学）、石川清子（静岡文化芸術大学）

鵜飼哲

ワークショップ III はゲストのカトリーヌ・ブラン氏が地震および原発事故の影響で来日を取りやめたため変則的な進行となった。最初にブラン氏から送られた論文の一部を司会の鵜飼が代読し、続いて石川清子氏が発表を行った。そののち鵜飼がブラン氏の論文に論評を加え、さらにみずからの発表を行った。ブラン氏の論文は氏がアルジェリアおよび米合州国の諸大学と提携して計画中の『ネジュマ』プロジェクトの紹介を主題とするものであった。このプロジェクトはアルジェリア戦争の表象の歴史を、フランス語、アラビア語、ベルベル語の3言語による諸資料のアーカイブ化を通して研究することを目的とし、この戦争の記憶の還元不可能な複数性を踏まえ、アーカイブへのアクセスの平等化を通して、来たるべき真の対話の条件を創出しようとするものである。石川氏はアシア・ジェバルの小説『愛、ファンタジア』を中心に、一人の女性作家の営為にアルジェリア戦争がいかなる作用を及ぼしたかを詳述した。アルジェリアのフランス語小説は、フランス本国の文学とは切り離された文脈のなかで、独立闘争の進展とともに変容を遂げていった。ジェバルもまた、五十年代の第一作から独立後の執筆休止を経た八十年代の創作再開まで、作家にとって書くことは、支配者の言葉を獲得した植民地出身の女性が、埋もれた同胞の歴史、とりわけ正史から抹消された女性たちの声をいかに自己のエクリチュールに絡めとっていくかという試行錯誤の過程でもあった。鵜飼はジャン・ジュネの戯曲『屏風』の受容史を入り口に、アルジェリア戦争経験の複数性が、この作品中の植民者の形象にどのように繰り込まれているかを検討した。予定では、直接的な水準では明白に人種差別的に理解される植民者の台詞が、強調点を移動することで作者自身の思想と触れ合うにいたる構造の分析を企図していたが、時間切れのため、他の機会を期してワークショップを閉会した。

Ⅱ 書評

塩川徹也『発見術としての学問——モンテーニュ、デカルト、パスカル』、岩波書店、2010年

評者：石川知広（首都大学東京）

本書は1995年から2009年、すなわち著者の東京大学教授在任とほぼ重なる期間、折々に公表された11の文章を収録したものである。全体は、自らの学問的営為を「言葉への愛」として定位し直す序章、学問論と専門研究（パスカル、モンテーニュ、デカルト）からなる二部仕立ての本論、そして本論の間に挟まる「間奏の章」から構成される。著者自ら「ハイブリッド」と言うように、「フランス文学というディシプリンの意味と価値」を問うエッセイ群と学問実践の見本たる研究論文が、絶妙なバランスのうちに互いを支える不思議な魅力を湛えた書物である。

深い学識に裏打ちされ、明晰犀利でありながら常に折り目正しい著者の文章の特徴は、本書にも如何なく発揮されている。一例を挙げるなら、モンテーニュとデカルトに立脚しつつ「良識・分別」を論じた第三章は、一言一句ゆるがせにしない原典の厳密な読みを基にいわゆるモラリスト文学と哲学的認識論の臨界点を見事に浮かび上がらせるという意味で、フランス的な「文学研究」の真骨頂を示すものといえよう。また、日本における二種類のフランス文学研究の通約不可能性を浮き彫りにした第二章の重い問題提起は、元がバリの高等師範学校におけるフランス語講演であることと相俟って、フランスと日本を股にかけて活躍する著者の面目躍如たるものがある。

初めて本書に接したとき、『発見術としての学問』というどこかルネッサンス的な響きの書名に心惹かれた。これは序章に付された副題に由来するが、そこに、本書に籠められた著者の深い思いを推し量ることは必ずしも外れではなかろう。過去の達成に安住することをよしとしない著者は、冷静沈着な語り口で学問的反省を試みるが、その真摯な筆致は思わず読む者の襟を正させないではない。始めにパスカル研究にまつわるパンドラの匣にも比すべき「複雑で困難な事情」が三点指摘されたあと、中でも特に、パスカル研究はどんなディシプリンに属するのかという問いに焦点が絞られる。曰く、テキストを「その内容と姿形に即して理解することを目指す」ディシプリンがなければならないが、「言葉への愛」philo-logia たる「文献学」こそまさにそれであろう、そして、

この意味の文献学とは、「知恵への愛」 philo-sophia たる哲学との対比で捉えるべき「普遍的なディシプリン」の謂であり、「他者への愛」を原動力とする「万人に関わる普遍的な営み」なのではないか。——つまり、すべては、原典に即して原著者の「体験と思想をよみがえらせようとする試み」に行き着くのである。ここには、控え目とはいえ、躍起になってテキストから人間を排除する昨今はやりの流儀に対する断固たる異議申し立ての音が響いているといつてよい。そういえばモンテーニュは、ゼノンの言葉に拠りながら、物事を学ぶのに熱心な良き「フィロログス philologous」と言葉にしか関心をもたない悪しき「ロゴフィルス logophilous」との相違に注意を促していたが、これこそまさに著者の言いたいことに通じるのではないか（『エッセー』I-26）。

実を言えば、気になる「発見術」という言葉は序章のどこにも見当たらない。それなら、なぜ著者はわざわざそれを序章の副題、ひいては書名にまで用いたのか。たしかに、序章への反歌と思しき「あとがき」にならこの語は二度姿を現すが、そこでも結局、どのような意味で学問（文献学）が「発見術」なのかという肝心の疑問には答えがないままである。あまつさえ末尾で、この標題自体が編集者の発案であることが明かされる（『薔薇の名前』？）。そもそも、発表時の序章の題名は単に「言葉への愛」だけだったらしい。

本書を通読していて、何箇所か、ふだん折り目正しく抑制の利いた著者の文章には珍しい並はずれて率直な言葉が目打ち、いつまでも心に残った。たとえばこんな具合だ。「とは言え、（中略）フランス近世の思想家やモラリストを読むのは心底楽しく、そこに何かの発見があれば、手の舞い足の踏むところを知らない心地になった」（「あとがき」引用者強調）。なるほど、学問の根底にあるのは人間存在に骨がらみの好奇心（libido sciendi）であり、その最大の満足は探し物の発見だろう。しかし、所詮天才ならぬ身の発見できるものなど高が知れているし、他に先んじて何かを探し当てる喜びにも、むしろどこか後ろめたさが伴うのがふつうではないか。あとがきとはいえ、学問の喜びを語るのに、なぜこれほどにも晴朗無比の率直さをもってすることができるのか。著者が言いたいのは、単なる好奇心の満足以上のもっと奥深い別の何かではないか…。

上に引いた『エッセー』（I-26）をさらに追って見よう。するとそこには、哲学は「われわれを自由にし」、「自己を知り、よく死に、よく生きることを教える」学問であるという言葉が見つかる。また、「哲学の議論は、それに携わる人々を快活にまた愉快に」し、「知恵の最も明白なしるしは、常に変わらぬ喜びであり、そのありようは、（中略）常に晴朗である」ともある。さて、言葉を介して熱心に学ぶ上述の「フィロログス」とは、まさに知恵を愛する「フィロソフォス philosophos」の謂にほかならないだろう。モンテーニュにおいて文献学は哲学と隙間なく重なるのである。そうだとすれば、私たちが学問によって発見すべ

きものは、個々の学術的知見であると同時に、それを超え、自己と他者を分か
つとともに結ぶ「普遍的存在」の真実であり、喜びのうちに生きよく死ぬ
ことを教える知恵、まさに高く晴れ渡った空のような快活な知恵だといっ
てよいのではあるまいか。問題はただ、そのような境地は、筆者を含め凡人の手の
易々と及ぶものではないということだ。

小倉博孝編『コルネイユの劇世界』、SUP 上智大学出版、2010 年

評者：千川哲生（広島大学）

本書は、2006 年 11 月に上智大学で開催されたピエール・コルネイユ生誕 400
年記念国際シンポジウムのアクトである。

「あとがき」によれば本書のテーマは「規範と自由の戯れ」である。たしか
に、コルネイユのキャリアを理解する上で規範と自由の対立軸は欠かせない。
コルネイユは半世紀近くに及んだ創作活動の過程で、古典主義的規範に抵抗し
ながらもその成立に貢献したからだ。ただし、各論者が問題意識を共有してい
たラシーヌのシンポジウムのアクト（『ラシーヌ劇の神活力』SUP 上智大学出
版、2001 年）と比べると、本書ではすべての論考が同じテーマに基づいてい
るわけではないので、描き出されたコルネイユ像が若干把握しづらいという印象
は否めない。

しかしながら、共通テーマに縛られず、日米欧の専門家 9 名がそれぞれ自由
に論を展開したおかげで、コルネイユ研究の多岐に渡る諸問題を提示できたこ
とは本書の最大の収穫である。第一部には 17 世紀の文脈にコルネイユを置きな
おす論文が 5 本、第二部にはヨーロッパや日本でのコルネイユ劇受容に関する
論文が 4 本収録されている。第三部にはコルネイユ劇の現代的意義を取り上げ
た論文と対談がそれぞれ一本ずつ収められている。いずれも劣らず興味深いも
のだが、紙幅の関係上、そのいくつかを手短に紹介したい（なお、仏語論文は
すべて日本語に訳出され、原文は省略されている）。

数度の来日経験があるクリスチャン・ビエは、おそらく日本でもっともよく
知られたフランス 17 世紀演劇の専門家である。現代演劇にも精通しているビエ
は、広い学識を生かして本書に論考を二本寄せている。「コルネイユと諸矛盾の
問題」では、多種多様な解釈に開かれたコルネイユの劇作術が受容者との関連
から俎上に載せられる。各戯曲は高度に自律した世界を構築しているように見
えるが、筋の過程で提起された政治的、道徳的問題に対して、結末で明快かつ
一義的な解答が示されるわけでは決してない。そのため読者や観客は、様々な

問題に関して熟考するように誘われることになるという。

日本での知名度はさほど高くないが、フランス 17 世紀演劇の優れた研究者ヘンリー・フィリップスの「コルネイユと教会」は、当時の世俗演劇が直面していた聖俗の葛藤と融和の問題という巨視的な見地からコルネイユの手掛けた宗教書の仏訳と彼の宗教劇を一貫した連続性の中で捉えており、きわめて示唆に富んでいる。

秋山伸子の「コルネイユと仕掛け芝居」は、コルネイユの機械仕掛けの悲劇三作品が、音楽の利用について徐々に発展していき、オペラの誕生につながったことを論証したうえで、『金羊毛皮』がヒロイズムの変質という現象を示しているゆえにコルネイユの後期劇作術の展開に適切に位置づけられるという新鮮な着想を提示している。

井村順一は、喜劇『舞台は夢』のバロック的傾向の強い初版と、現在ではあまり顧みられない 1660 年以降の改訂版を取り上げ、両版の第五幕第三場をガブリエル・コネサの対話分析を思わせる鮮やかな手つきで比較検討し、コルネイユが構成、文体の点から古典主義的傾向を強めるに至ったことを詳細に跡付けている。

本書には共通テーマがみられないことを先に指摘したが、コルネイユ劇がわが国にまだまだ浸透していないという状況を鑑みれば、あえてテーマを設定しないという選択は至極妥当だったといえる。ただし、この選択は、そもそもヒロイズムや政治を争点とするコルネイユ劇が、現代のわれわれにも共有できるような問題を今も投げかけているのかという根本的な疑問とつながっているように思われる。事実、シンポジウムのパネルディスカッション（本書未収録）においてラシーヌの演出家、研究者として知られる渡邊守章が、日本でのコルネイユ受容が困難な理由として、絶対王政下で誕生したコルネイユ劇はそのコンテクスト外では成立し難いこと、コルネイユ劇の基調を成している法廷闘争のモデルが日本では馴染みが薄いことなどを指摘したという（本書 412-413 ページ）。この問題提起を軸として、伊藤洋と井村順一の対談が本書の最後で繰り広げられる。本書に寄せた論考で、日本初のコルネイユ劇受容である『ル・シッド』の翻案および上演台本を実証的に分析した伊藤と、『舞台は夢』（岩波書店、2001 年）の訳者でもある井村は、コルネイユ劇の受容可能性に対して決して悲観的ではない。フランス 17 世紀演劇研究の泰斗であり、舞台の実践にも造詣が深い両名は、コルネイユ劇の土台をかたちづくるレトリックや歴史的視座など、根本的に位相の異なる文化的背景を再認識しなければならないという点で一致する。この指摘は現代日本演劇の今後の発展を考えればじゅうぶん首肯できるばかりか、専門的な問題や展望を切り開く問題、さらには異文化における受容や演出の問題まで取り上げた、実り豊かな本書の掉尾を飾るのにふさわしい結論となっている（文中敬称略）。

評者：山中哲夫（愛知教育大学）

ついに『マラルメ全集』（全五巻）が完結した。

第一回配本は「ディヴァガシオン」その他の散文や批評を収めた第二巻で、一九八九年のことであった。おそらく詩人没後百周年を目指しての刊行であったろう。ちょうどその百周年目にあたる一九九八年に第三巻「言語・書物・最新流行」が出版された際、松浦寿輝氏は同年六月九日付の朝日新聞夕刊にこう紹介している——《詩人の生前に刊行された初版本と初出テキストを基に緻密な註解つきで校訂され、しかもプレイヤッド版からもれている重要な作品まで網羅的に収めたこの日本語訳『マラルメ全集』が完結すれば、マラルメの全貌を集約した決定的な「書物」が、世界に初めて出現することになる。》ここで言及されているプレイヤッド版というのは、一九四五年初版の全集のことで、年譜も含めてテキストの内容その他に多くの不備がある不完全なものであった。

それが旧版全集刊行以後に新たに発見された資料を可能な限り網羅した、決定版とも言える全集がわが国で出版された、というわけである。この全集が完結すれば、世界初の快挙となるだろうと松浦氏は書いている。その全集がここに完結した。ただ、残念ながら世界初とは行かず、すでに全面改訂したプレイヤッド新版全集が刊行された後ではあったが、それでもこの全集の完結によって、極言すれば日本語だけで世界水準のマラルメ研究が可能となるだけの環境が整ったとさえ言えるだろう。

ついに、と冒頭に記したのはそれほどの重要な記念碑的書物が世に出た、という意味ばかりではない。一九八九年に第一回配本が開始されて、その後間隔を置きながらもほぼ順調に刊行されてきた全集が、あと残り一卷（もともと待たれていた「詩集」）というところで中断し、その後長い間中断されたままになって、われわれは奇しくもマラルメ的宙吊り状態に置かれることになった。書物の不在という物理的・時間的 *blanc souci* と、出る、出る、と喧伝されながらなかなか出ない *inanité sonore* を体験させられることになった。それがいま、ここに完結したのである。ついに、というのはこのような事情も含んでいる。

この最後の一卷には七〇〇頁以上に及ぶ膨大な解題・註解が別冊として付いている。それを読むと、編集者たちがいかにマラルメに忠実に詩集を復元しようと努めてきたかがよく分る。マラルメの詩篇の排列やヴァリエーションの研究については、すでに戦前から鈴木信太郎博士によって取り組まれてきたもので、その成果は上下二巻の『ステファヌ・マラルメ詩集考』（1948, 1951）において

見事な結実を見たが、なおその後発見された新資料に基づいて、従来にない新しい（というよりもマラルメの着想により近い）形で詩篇が排列されることになった。一例を挙げると、従来までは独立した詩篇として扱われていた「聖ヨハネ頌歌」は“エロディヤード詩群”と呼ばれる一連の詩篇中の聖史劇「エロディヤードの婚礼」のⅡとして位置づけられている。このエロディヤード作品群に関する試みには目を瞠るものがある。

さらに、いままで「散文（デ・ゼッサントのために）」あるいは遠慮がちに「プローズ」と訳されてきた有名な詩のタイトルが、本来の意味である「続誦」と訳出されて日の目を見たことは喜ばしいことである。タイトルをこのようにキリスト教典礼用語として解釈した理由については、註解に詳しい解説がついているので是非一読していただきたい。

編集者たちがもっとも腐心したのは、テキストの決定であろう。わが国でもマラルメのテキスト・ベータベース化が試みられ、それに伴って長い歳月に渡ってテキストの確定が懸案となっていた。マニュスクリ、プレオリジナルなどの精密な照合、検討作業を重ねた末の、この詩集における一篇一篇のテキスト確定は、まさにこの全集の最大の成果と言ってよい。註解では一部詩篇を除いて、重要なヴァリエーションについては細大漏らさず言及されており、それだけでも優れた論文に値する。

最後に、入手しがたい二作、詩人の幼い死児を悼んだ、おそらく本邦初訳と思われる「アナトルの墓」と、これも初訳と思われる「概念との結婚」が収められていることも意義深いことと言わなければならない。

真屋和子『プルースト的絵画空間——ラスキンの美学の向こうに』、水声社、2011年

評者：湯沢英彦（明治学院大学）

真屋和子氏は日本のプルースト研究者としては、たいへん珍しい経歴をお持ちの方である。というのも本書の「あとがき」によるならば、プルーストを本格的に読みはじめるまえに、同氏はオックスフォードに2年近く滞在されたことがあって、彼の地の大学付属美術館やロンドンをはじめイギリス各地の美術館で、ターナーやラファエル前派の画家たちの作品に親しく触れることができたという。「あとがき」の冒頭では、滞在のさまざまな局面で真屋氏が何度も見つけたにちがいない、移り変わりやすいイギリスの空の表情や川面にぼんやり漂う朝霧の光景が語られている。同氏の個人的な記憶の核には、ターナー的な風景がまちがいに息づいているのだ。

そうしてひとの内に堆積した「経験」は、ときに「運命」としか呼び得ないような出会いに導くこともあって、それが真屋氏の場合、ブルーストの『失われた時を求めて』であり、とくに画家エルスチールが描く一連の海洋画だった。小説のその部分にさしかかったときは、おもわず「身震い」がして、「ターナーの異なる絵がつつぎと無数に浮かんで」きたそうである。まったく稀有なブルースト経験だといっていいし、ブルーストの文章とイギリスで過ごした2年間の記憶が不意に結びついた喜びが、この400頁を超える大部な研究書の誇るべき出発点なのだ。真屋氏が「ブルースト的絵画空間」の探求に踏み出すのも、「ラスキンの美学」のさらに「向こう」にまなざしをそそぐのも、それはブルースト研究上のロジックによって要請されたというよりも、むしろ同氏にとって、選択の余地のない人生の必然だったようにすら思える。

そしてその印象を裏切らぬ、充実した論考が並ぶ。すでに国の内外の学術雑誌に発表された手堅い論文をもとに全12章で構成された本書は、文体や作品構成の問題などさまざまな論点を含んでいるが、その全体の礎となるのは、画家エルスチールの海洋画とラスキンによるターナー論を比較した第2章であろう。海をあたかも陸のように描き、また他方で陸を海のように描いて物と物の境界線を取り払ってしまい、小説の主人公に「隠喩」の技法の重要性を悟らせたエルスチールの「カルクチュイ港」は、ターナーなしには生まれなかったのだ。またターナーに触発されたラスキンのさまざまな文章の存在なしには、ブルーストにおける、この特権的な場面の誕生もおそらくなかっただろう。分析は仔細に渡り説得力に富む。エルスチールの作品の源泉から、マネやモネの水辺の光景を排除するわけにはいくまいが、しかしそこにターナーの作品をみないのは、もはや大きな過ちだろう。

ではホイッスラーはどうか。彼はラスキンを名誉毀損で訴えている。ところが真屋氏は慧眼にも、ラスキンとホイッスラーに通底する感覚があることを、実はブルーストは見抜いていたのだ、と教えてくれる。インク瓶を投げつけたようだとか酷評された「黒と金のノクターン」を、ホイッスラーは「私の全生涯の経験によってそれを描いた」のだという。この抗議の声を知人宛の書簡で引用しているブルーストは続いて、ラスキンがロセッティーに向けたことば——「多年にわたる夢、愛情そして経験の帰結」としての作品——を紹介している。ブルーストは、対立しあった二人が同一の光で同じ場所を照らしている、ともいっている。そして真屋氏も、ブルーストと他の芸術家たちを一筋の光で巧みに結び合わそうとするのだ。

たとえば、バーン＝ジョーンズはどうか。五月の夕べの野原に香るサンザシの花の描写や、あるいは「花咲く乙女たち」が最新流行の海岸を闊歩する様子から、真屋氏は、時間も場所も現世を超え出たかのようなラファエル前派の世界に読者を招く。一瞬不意をつかれたような気になるが、書簡や草稿を精査し

つつ論をすすめる真屋氏の案内についていけば、作家のことばがカイエの行を埋め余白に走ってゆくときに、ラファエル前派の神秘的な光がそこに差し込んでいたかもしれないと、たしかに思えてくる。

本書の最後の3つの章は、ラスキンとブルーストにおける芸術作品の構成をめぐる問題に捧げられていて、まず両者の問題意識の共鳴振りと議論をささえる比喩の類似性に驚かされる。ふたりにとって書物の理想は、たとえば野菜と肉の味が見事に調和した「シチュー料理」のような、部分と部分が有機的に結び合わされることだ。細部と細部の調和ある関係をなによりも重視する姿勢は、衣服や大聖堂をめぐる両者の記述からもうかがい知ることができるのだが、ただし、ラスキンにとってもブルーストにとってもより肝心なことは、その「調和」を可能にする人間の「手仕事」であり、それを導く「精神」であり、つまり「魂の仕事」として作品が作成されなければならないのだ。そのときはじめて、ばらばらの断片は「生きた有機体」へと統合される。真屋氏の作業は、こうした美学の歴史的な出自や限界を正面から問うかわりに、ブルーストの文章の細部に織り込まれたラスキンの声を聞き分けることに向けられている。そこから立ち上るのは、これまでになく深く豊かに響くブルーストとラスキンの二重奏である。その指揮者たる真屋和子氏の手腕に、大きな讃辞を送りたいと思う。

アンリ・ラクシモヴ（吉川佳英子・岩野卓司訳）『失われたパリを求めて——マルセル・ブルーストが生きた街』[2005]、春風社、2010年

評者：田村奈保子（福島大学）

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』について短く語ろうとすると言葉に窮することがある。20世紀文学の最高傑作の一つであることは間違いない。しかし、内容に関しては一言では語れない。哲学・思想、無意志的記憶、芸術論、社交生活、スノビズム、同性愛、自伝性… これらを小説に持ち込んだこと、これらを複雑に絡めて小説を構築したことがこの作品の特徴であり、新しさであった。そして、約1世紀前のパリの息づかいを伝える小説であることも忘れてはならない。それはまさしく作家が生きていたパリである。全体が均等に限なく描かれているわけではないが、それでも私たちはそこから当時のパリを知り、100年余前の同地に思いを馳せることができる。もちろんどの文学作品も書かれた時代の空気を色濃く伝えている。それはブルーストのように芸術・思想から風俗・流行にまで強い関心を持っていた作家においては一層強く、特筆すべき点でもある。読者である私たちは、作家の仔細な描写を通して、生

き生きとした時代の息吹を感じて楽しむのだ。時代背景についての豊富な知識があれば、読書の喜びはいや増すものとなるだろう。

アンリ・ラクシモヴ著 *Le Paris retrouvé de Marcel Proust* (Parigramme, 2005) は、小説家・ブルースト研究家である著者のエッセイ風研究書である。研究者のみならず、文学愛好家、パリを愛する人たちをも惹きつける好著といえよう。著者は、物語と作家の実人生の大部分の舞台であったパリを小説世界と照合させつつ概説した後、「オートゥイユ、パッシー」、「モンソー平原」、「シャン＝ゼリゼ」、「フォーブール＝サン＝トノレ」、「グラン・ブルヴァール」の5地域に分けて章立てし、さらに解説を加えている。作家も小説も、パリというトポスにその身を浸しているため、作家の生活空間としてのパリと小説の舞台としてのパリとを単純に分かつことは困難だ。ゆえに、両者を交錯させつつ、読者をそこに誘うパリ案内として本書を成立させた巧みさは賞賛すべきであろう。作家が通ったホテル・リッツのレストランやスワンがオデットを探したカフェ・アングレ、小説のモデルも含めたブルーストの知己ら、「失われたパリ」の風景や人々の数多くの写真の掲載も、現実と小説世界が綯い交ぜになった彼の地へと私たちを誘う。

もちろん本書は、単なるパリ案内を超え、研究書としても評価されうる。ブルーストのパリでの生活、そこで繰り広げられた交友関係や具体的な地名などは、研究者には当然親しいものである。しかし、あまりに多岐にわたり複雑な様相を示すために、時に記憶からこぼれ落ち、また誤った理解のまま過ごしてしまうことがあり得る。それらが仔細に書き記された本書は、研究者のための備忘録の一面も持ち得る。

また、ブルースト愛好家やパリやフランスを愛する人々にとっても、示唆に富んだ好著である。特に19世紀末からベル・エポック期という文化の爛熟期は、古き良きパリの華やかなりし頃として、ファンも多かるう。当時を彷彿とさせる幅広いエピソードがブルースト交友録における実名を伴って紹介されており、当時の空気を遺憾なく伝えている。

このように本書は、ブルーストが愛した当時のパリの様子を生き生きと詳細に伝え、私たちに『失われた時を求めて』をより深く読むための豊富な知識を与えてくれるのである。

吉川佳英子・岩野卓司両氏の本書の翻訳（邦題『失われたパリを求めて マルセル・ブルーストが生きた街』、2010年、春風社）は、したがって、非常に意義深い。「訳者あとがき」を担当された吉川氏は、カンブルメール家をテーマに据えた研究で博士論文を書かれており（*Les Cambremer dans À la recherche du temps perdu*, Sogensya, 1998）、当時の社交界や芸術論にも精通されている。「あとがき」における解説に加えて、本文に付された丁寧な訳注がそれを物語っている。また、全体を通して読みやすい文体であることも本書の魅力のひとつ

であろう。日本の読者が本書を「ブルーストの枠を超えて19世紀末から20世紀初頭にかけての文化論、都市論としても、また歴史の書としても愛読され、もっと言えば時代を超えたガイドブック」（「訳者あとがき」より）として享受しうるのは、訳者の知識や技量と細やかな配慮によるところも大きいと感じる。

なお、本訳書は「日本図書館協会選定図書」とされたことを付言し、吉川・岩野両氏の貴重な翻訳作業に敬意を表する。

岩野卓司『ジョルジュ・バタイユ——神秘経験をめぐる思想の限界と新たな可能性』、水声社、2010年

評者：福島勲（北九州市立大学）

ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）が鬼籍に入って、半世紀が過ぎようとしている。このわずか半世紀の間にも、日本でのバタイユ評価は浮き沈みがあり、一時は反逆のアイコンとして多くの人々（今では考えにくいことだが、蓮實重彦も三十年前『事件の現場』で言及している）の参照先となったバタイユも、消費財のように飽きられたのか、その思想的インパクトは過去のものとされ、知識人たちからはブームの去った玩具のような扱いを受けているのが正直なところである。実際、かつて浅田彰によって人口に膾炙させられたバタイユ像は、澁澤龍彦、生田耕作らの名前とともに想起される死とエロティシズムの作家というイメージの更新には役に立ったが、そのシンプルに整理されたバタイユ像はたちどころに飽きられてしまい、作家自身のテキストが持つ潜勢力に十分な注意を促すこともなく、バタイユを押し入れにしまわせてしまうという、きわめて不幸な結果をもたらしてしまった。そして、あとには、草も生えない、踏み荒らされた土地だけが残った。

だが、死後五十年という節目の年を前にして、日本のバタイユをめぐる環境は、静かに、だが、確実に、新しい植生を育みつつある。この新しい、かつ多様な植生を生み出す土壌となったのは、時流に見捨てられた荒地地に水を撒き、種を播きつづけた湯浅博雄、西谷修、酒井健、吉田裕、里見達郎といった世代の仕事であるが、彼らからいち早く養分を吸収し、そこから独自の根を伸ばし、枝を広げてみせたのが本書の岩野卓司である。著者の岩野は、ジャン＝リュック・マリオンの指導のもとに、フランスで哲学をバカロレアから始めて博士まで修めた名実ともに「哲学者」であるが、バタイユを研究対象として選んだこの風変わりな哲学者が著した本書は、バタイユが一方的に持ち上げられ、そして、一方的に読み捨てられていった「思想」という領域において、鮮やかなバ

タイユの読み直しを行っている。

例えば、岩野は、本書で自分が取った方法を「バタイユに逆らいながらバタイユを読む」という言葉で表現している。それは、既成のバタイユ像に抗いながらテキストを読むということだけでなく、何よりも、バタイユの主張や概念をふりまわすだけの「思考停止」に陥らないために、バタイユの「言いたくないこと」、「忘却したこと」までも考えて読むこと（322-323 頁）、つまりは、テキストの中にある「無為なるもの」（35 頁）への注視を呼びかけるものである。それは言わば、交通の便のためにとアスファルトで平坦に塗り固められてしまった道路の隙間をがち割って生えてくる雑草への注視のみが可能にする、クリシェの下に抑圧されたテキストの豊穡性の回復である。

とはいえ、どうしてこうした複雑な戦略が必要となるのだろうか。それは、バタイユの作品のいくつかには、作家自身の意図とは裏腹に、伝統的な形而上学を肯定すると言われても仕方のない曖昧な表現が散見されるからである。例えば、『エロティシズム』の立論では、失われた「原初の連続性」の回復という起源の神話が前提とされているし、また、頻出する「裸」（衣服という夾雑物を排した無垢性）や「真理」という言葉づかいにも、形而上学的な発想の残滓を見ないわけにはいかない。哲学研究者としての岩野は、バタイユの作品に見られるこうしたバタイユらしからぬ側面、「作品の中の作品をこえる何か」に着目する。その態度はあたかも、患者の夢の話を聞きながら、そこに患者自身が意図していなかったノイズの聴取を試みる精神分析医を思わせるものだが、この著作が、精神分析医のパターナリスティックな態度とはっきりと区別されるのは、岩野がこのノイズの中に、バタイユの体系を断罪するための欠陥ではなく、むしろ、より一般的に、私たちの認識の限界点を見出している点にある。

本書が執拗なまでに追求しているのは、経験と科学（形而上学、メタ言語）の両者はそもそも不即不離であり、切り分けができないという事実、ピュシスに対するメタ・ピュシスというメタ化の行為そのものが不可能であり、地と図は切り分け不可能な、決定不能性の中にあるという事実である。エッシャーの絵、ウロボロスの輪、クラインの壺、ゲーデルの不完全性定理のようにして、真理をめぐるディスクールは常に到着することのない悪循環の中にある。岩野はバタイユの思想と文学作品の双方を、この決定不能性の上に改めて置き直すことによって、それらを形而上学からきっぱり切断し、経験（体験）と虚構という文学の問題へと大胆に接合して見せる。

しかしながら、本書の鮮やかな分析も、岩野にとっては、まだ「さしあたり」のものに過ぎない。本書は「経験」を扱ったものだが、同じく重要なテーマとして、すでに「神性」についての分析が予告されている。バタイユの作品や思想が「神性」といかに向かいあっていくか、次回作も待たれてならない。

アントニーヌ・マイエ（大矢タカヤス訳）『荷車のペラジー：失われた故郷への旅』[1979]、彩流社、2010年

評者：細川哲士（立教大学名誉教授）

周回遅れのランナーがトップを走っているような感慨を与えるこの物語は誰が読むのにふさわしいのか。フランス語圏カナダに関心ある人には勧めるまでもない。また、手放しで面白ければ、ほっといてもおのずから読む人は増えるだろう。そういう本でもないようだ。

カナダの北東部に植民し、アカディと呼ばれることになった「楽園の」地を、英仏間の争いのとぼっちりを受けて追われ、アメリカ南部に移住させられたアカディアンたちが、失われたものをもとめて、北の故郷へ向かって荷車の旅をする、という話らしい。

この希望にみちた絶望的な旅が、イスラエルの民がカナーンの地を求める旅に似ていたとしても、そして聖柩にかわる大事な長持ちを運んでいたとしても、決定的に違うところは、かれらを支えてくれる絶対者がいないということだ。むしろこの旅は人民中国の長征をおもわせるところがあるが、根本的に違うのは、旅の仲間が増えていくよりも、日々ぼろぼろと命が失われていくことだ。そして行く先々の土地の私有化がすべて完了してしまっていて、子どもの遺骸を埋葬する小さな穴を掘る場所にも事欠く有様だ。

素人の読者にこのような大雑把な見通しがひらけるのは、じつは、じっと忍耐をかさねて物語の三分の一を読破したあたりのことである。だからこれはかなり取り付きにくい本の部類に入るだろう。それがこの本のスタイルでもあり、作者の戦略でもある。

読者はまず、まったく事情が分からぬまま、荷車の一行のなかにたたきこまれる。徹底的に、*in medias res*（事件の真ん中）に置かれるわけだ。それが荷車の一行であるとわかるのさえ、周りの言葉にすこし馴染んでからのことに過ぎない。分かりにくいのは言葉遣いや、語彙の珍しさではない。植民または移民が家族単位で行われたことにたぶん由来する人間関係の独自性から発する人の呼称のシステムそのものがなかなか厄介なのだ。戸惑いはホメロスの世界にはじめて接したときを思い出させる。また自分の親戚のじいさんばあさんの世間話をひさしぶりに聞くときに似ている。これは翻訳がなかったら僕には乗り越えがたい障害となったはずだ。

作品にはプロローグとエピローグを除き、第1章から第17章という章立てがある。章立てはあるが単に数字のみで実にそっけない。この芸のなさは何かと、いろいろ考えてみたがわからない。ただ各章それぞれを要約しようとするとう極

めて難しいことだけは分かるし、中心をなす語り部も変わっていく。ウェルギリウスが『アエネアス』を書き、ロンサルが『フランシヤード』を綴ったように、アントニーヌ・マイエも「アカディの建国神話」を編もうとしたのだろう。各章がひたすらそれに向かって進む。だが彼女には、ローマもなくフランスもなく、アカディが国になったこともまたなく、たよるべき神話も他には求められなかった。

作品のなかにはプロの語り部とそうでないものがあるが、いずれにしる「神話」は各人の記憶の中におさまっている。とりわけ年寄りの頭のなかにはいろいろな時代や場所の記憶が重層的につまみついて、それが現実を動かしている。「史実」と折り合いをつければ、この物語の舞台は1770年ということになるだろうが、生き残った家族と仲間をつれて、牛にひかせる荷車の旅をはじめた「おっかさん」ペラジーの頭の中の時間では、そんなことへのこだわりは少しもなく、すでに死んでいるはずの英雄も恋人として現存する。旅は都合10年続いたらしいが、読んでいてそういうことに気づくことはない。（エピローグを何度も読み返してはじめてわかることだ。）読者には、まず最初のうち、実ののろのろと時間が過ぎるのが感じられ、やがては仲間と同じような時間を共有するようになっていく。つまり時間はどうでもよくなってくる。こういう感覚はそんじょそこらでは得られないものだ。

旅はわずかな希望と多くの困難にみちている。仲間のために命を捨てるヒーローもあらわれる。これは願望にもとづく幻影かもしれない。だがこの物語を確実に特徴づけるものは、出口のなくなった場面で、かならず活躍するパニエルジュの末裔のような二人のトリックスターの存在だ。ひとりは出自の分からぬ若い老女で、呪術師・薬師・産婆の役を果たすセリーナ、そして旅の途中から加わった、あらゆる話をごちゃまぜにして物語る道化師ピエールである。余裕のない人たちの示す余裕は崇高でさえある。このふたりにはわれわれ読者もおおいに救われるだろう。

『荷車のペラジー』は、アカディの歴史から自立した物語ではないが、それを離れたときから、物語の面白さが際立ってくる。そういう自立をうながすべく、作者が読者にあらかじめ要求している知識が得られるような一本を訳者がすでにものしている。『地図から消えた国、アカディの記憶』（書肆心水、2008年）。お急ぎの方はこの本の「第Ⅱ部 アカディの歴史」を一読されたい。ただし、アカディの悲劇をひとりの娘を通じて歌うロングフェローの長詩を、著者自らが試み第Ⅰ部に置いた新訳「エヴァンジェリンヌ」は、昭和5年に出た斎藤悦子訳（妹の未完成な遺稿をもとに兄の斎藤博が訳出した）『哀詩 エヴァンジェリン』に遠く及ばない。この斎藤兄妹訳は実に見事で、岩波文庫には稀な名訳であり、復刊が待たれる。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は資料調査委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇推薦要領

学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇締め切り 毎年3月・9月末日

◇宛先 日本フランス語フランス文学会資料調査委員会までメールでお送りください： cahier_sjllf@yahoo.co.jp

cahier 08

編集 資料調査委員会

発行日：2011年9月5日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL:03-3443-6671 FAX:03-3443-6672